

8. 考 察

(1) 青葉山周辺の旧石器時代遺跡

仙台市内には大別して、高位、中位、低位の三群からなる段丘面が発達する。青葉山段丘は高位段丘に属し、越路火山灰、愛島軽石（Ac-Md）、川崎スコリア（Za-Kw）等が覆っている。また、中位段丘は台原段丘が相当し、関東地方南部の下末吉段丘に対応するといわれている。台原段丘上には、愛島軽石、川崎スコリア等が堆積する。さらに低位段丘には仙台上町および中町段丘面が対比され、川崎スコリアが堆積する。青葉山周辺で確認された旧石器時代遺跡は、青葉山遺跡が高位段丘上に位置するほか、山田上ノ台、北前、上ノ原山の各遺跡は低位段丘上に立地しているといわれている。ここでは、青葉山周辺で発掘された旧石器時代遺跡の層位関係を整理し、各石器群の年代観を検討したい。

① 青葉山周辺の主要な旧石器時代遺跡の概要

【青葉山遺跡群】

青葉山遺跡群ではA、B、E地点で発掘調査が行われ、B、E地点の2箇所では4枚の旧石器時代の石器群が発見されている。ここでは前期旧石器時代から後期旧石器時代までの石器群が層位的に確認されている。B地点は東北大学埋蔵文化財調査委員会によって1984年に試掘調査され、翌1985年に本調査が実施された。B地点の基本層序では川崎スコリア層（Za-Kw）が5層上面に存在し、愛島軽石（Ac-Md）は8層に相当する。旧石器時代の石器群は3～5層と第11d層から検出されている。図30にはE地点の層序を示し、B・E両地点の石器群の出土位置を整理してみた。ここでの土色の対比をおこなうのにあたって、色相、明度、彩度の三属性を取りあげてみたが、各土層間の相違は微妙な明度と彩度の変化にもあらわれた。B・E両地点で共通して確認されているのが川崎スコリア層と愛島軽石である。川崎スコリアよりも上位の層序を観察すると、E地点では3層下部に始良Tn火山灰（以下AT）が堆積するという分析結果が得られている（第Ⅲ章7参照）。4層は上位の層に比べてうすい色調であり、「暗色帯」に相当する層といえる。川崎スコリアと愛島軽石の間では、上半が明黄褐色から明褐色を呈し、下半がより黄色味が強くなる。E地点では6層（上半の層の最下部）の下部に鳴子ー柳沢軽石（Nr-Y）が含まれる。愛島軽石より下位には明褐色の層（9・10層）があり、その下部に古赤色土と考えられる赤褐色土層（11層）が発達する。その下部には橙色の層を挟んで二ツ沢礫部層に相当する礫混じりの層が堆積している。

1) 青葉山遺跡B地点（梶原ほか1986）

この地点では、ATより上位の硬質ローム層の3層上面から二次加工ある剥片1点と剥片2点が出土し、「暗色帯」と考えられる4層からは剥片1点が発見されている。川崎スコリアのブロックを上面に含む5層の上面からは、サイド・スクレイパーやノッチを主体とする20点の石器が出土している。石材は珪質頁岩と珪質細粒凝灰岩が主体で、その他に瑪瑙が1点ある。南北約4m、東西約3mの範囲に分布し、石器群の南西に強い磁化を受けた部分があり、炉の存在が推定されている。5層上面の石器群は縦長剥片が主体となるが、剥片剥離の連続性のなさ、調整技術の欠如や自然面を有するものの多さなどから、明確な石刃石器群とはいえないとされている。石器群の年代観は5層上面に川崎スコリア層（約26,000～31,000Y.B.P.）が堆積することから、後期旧石器時代初頭の石器群とされている（梶原ほか1986）。

次に愛島軽石の約1m下位の古赤色土と考えられる11d層からは、玉髓製のスクレイパー1点、珪質シルト岩製のノッチ1点、ハンマーストーン（?）1点の計3点が出土している。石器群は愛島軽石より下位の古赤色土中とされる11d層から出土していることから、TL法の測定結果である187,200Y.B.P.の年代に近いものと捉えたい。石器群は前期旧石器時代に属するものと考えられる。また、排土中から、13点の石器が発見され、付着した土壌から11層中と7層以上等の二つの時期に分けられた。11層中のものは尖頭礫器、スクレイパー、剥片、石核3点である。石材は玉髓、瑪瑙、チャートなど多様である。7層以上のものはスクレイパー類と剥片が主体である。石材は珪質細粒凝灰岩やチャート、珪質頁岩などである。11d層および排土（11層）から出土した石器群の剥片剥離技



図30 青葉山遺跡群の層序と石器
Fig. 30 The stratigraphy and lithic artifacts in the Aobayama sites

術は、両極剥離が多用され、打面と作業面を頻繁に転移するものであったことがうかがえる。二次加工により作られた剥離面は、打面部が深く、先端部が浅く階段状剥離や蝶番剥離となるものが多い。また、スクレイパー・エッジには平坦剥離によるジグザグ状の刃部が作出されている。接合例はないが、尖頭礫器と剥片は同一母岩と推定される。7層以上の排土中出土の剥片は両極剥離によるものが存在し、その背面構成からは、求心的な剥片剥離の存在が予想される。スクレイパー・エッジには平坦剥離がみられ、側面観の平らな刃部が作出されている。この石器群は愛島軽石との上下関係は捉えられていない。

2) 青葉山遺跡E地点 (本報告)

この地点では、3層下部～4層上面より石刃、ナイフ形石器を主体とした石器群が出土している。ATが3層下部に相当するというテフラの分析結果から、石器群はAT降灰以降のものといえる。石刃の両側縁の一部あるいは先端部などに二次加工したナイフ形石器やエンド・スクレイパーが組成する。多くの石刃は、いわゆる「調整技術の発達した石刃技法」によって生産されたものと推定される。石材は珪質頁岩が多用されている。

次に、鳴子-柳沢テフラ (Nr-Y) より下位、愛島軽石の上位の7b層上面からは、斜軸尖頭器を含む尖頭器3点、剥片類6点が出土している。打面や作業面を頻繁に転移するような剥片剥離がおこなわれている。ほとんどの石器に自然面がみられ、さらに自然面打面も存在する。二次加工は、器体の周縁部に施され、素材面を大きく残す。したがって奥まで入る剥離はみられない。二次加工技術の特徴として、器体の厚い部分に施される大きな深い剥離と、鋭い刃部を作り出すための薄い面的な剥離があげられよう。石材は、珪質頁岩や玉髓のほか、軟質の頁岩や珪質凝灰岩といった比較的軟質なものも使用されている。

以上、青葉山遺跡群では大きく4枚の文化層が確認されている。

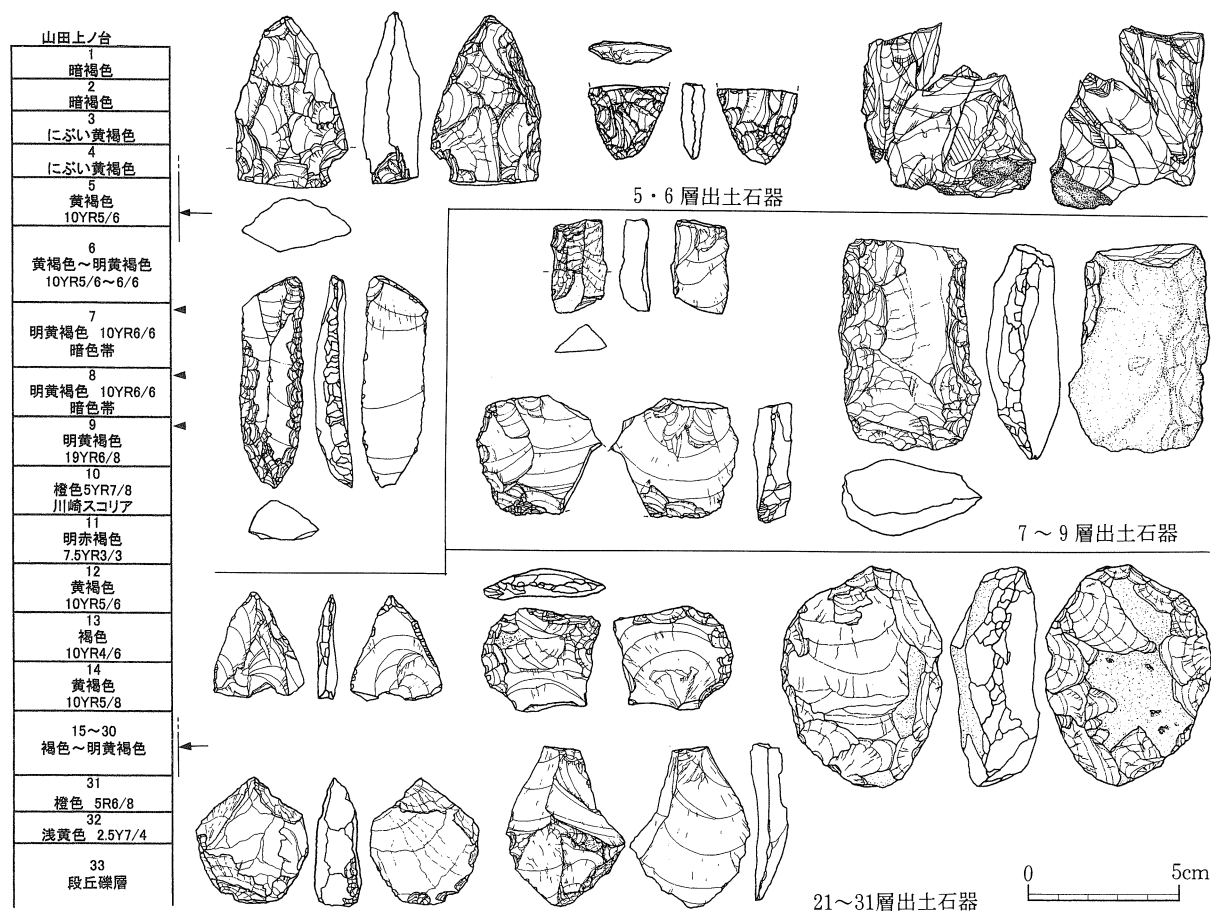


図31 山田上ノ台遺跡の層序と石器
Fig. 31 The stratigraphy and lithic artifacts in the Yamadauenodai site

【山田上ノ台遺跡】（主浜ほか1981、1987 及川ほか1985、鹿又2001）

当遺跡は仙台市教育委員会によって1980年度と1984年度に発掘調査が行われた。発掘面積は合わせて125㎡である。第4～9層、第21～31層にかけて石器群が層位的に出土している。層序を整理すると、川崎スコリア層が第10層に相当し、その上部のローム層を観察すると、上半（第5層）が軟質、下半（第6～9層）が硬質である。硬質のローム中では第6層と第7層以下で色調が変化し、第7層以下ではうすい色調となる。1980年度調査の層序での色調変化は青葉山遺跡E地点でみられた土層の変化によく合致する。このようなことから判断すると、第7～9層が「暗色帯」に相当し、第6層の下部付近にATが含まれるものと想定できる。川崎スコリア層より下部を概観すると、青葉山遺跡で確認された愛島軽石が確認されていないことから、山田上ノ台遺跡の第11層以下は青葉山遺跡の第5～7層に相当するものと考えられる。1980年度の調査では、第5層から6層上面にかけて尖頭器石器群が出土している。この石器群の包含層は軟質のローム層から、ATを含むと考えられる硬質ローム層上面といえる。「暗色帯」に相当する第7～9層からは、片面加工の石斧、幅広の剥片類が出土している。石斧は腹面側もポジティブな剥離面を大きく残し、側辺部に粗い階段状剥離が密集する。また、刃部を平坦に作り出すために細かい二次加工が施されている。川崎スコリア層より下位の第21～31層にかけては斜軸尖頭器、スクレイパー、礫器、石核を含む石器群が出土している。斜軸尖頭器は薄めの剥片素材であり、縁辺が直線的な側面観をもつ。スクレイパーには細かい剥離により緩やかなジグザグ状の側面観をもつ。平たい礫の石核の周縁から求心的な剥離がおこなわれている。礫器は角礫を素材とし、二次加工を施して尖頭部を作出したものが多い。1984年度の調査では、第5・6層から在地の石材である珪質凝灰岩や鉄石英を用いた縦長剥片の接合資料が出土している。「暗色帯」に相当する第7層から縦長剥片と寸詰まりの剥片が出土している。明確な石刃は存在しない。剥片2点が接合する。

以上、2回の山田上ノ台遺跡の調査結果、第5層と第6層上面出土の石器に接合関係がみられることや、両者の石器製作技術が類似すること、両層出土石器の平面分布が重なり同一の遺物集中地点を形成することから、これらは同一時期のものとみなされ、軟質ローム層からの出土した石器群と考えてよいであろう。

【北前遺跡】（佐藤ほか1982）

当遺跡は仙台市教育委員会により、1981年に発掘調査が行われ、5、6、9、15、17層から石器群が層位的に出土している。当遺跡の基本層序は山田上ノ台遺跡と近接することもあって、層位の対比も可能である。層序を整理すると、7層が川崎スコリア層であり、その上部のローム層を観察すると、上半（5層）が軟質、下半（6層）が硬質である。5層に比べて6層はうすい色調であることから、6層が「暗色帯」に相当するものと考えられる。5層では最下部付近にATが位置すると想定される。軟質ローム層である5層の上面から石刃およびスクレイパーを含む石器群が出土している。石材は全て珪質頁岩である。「暗色帯」に相当する6層の上面からは剥片が3点、5層を掘り込んだ落ち込みの埋土中から剥片が2点、スクレイパーが1点、それぞれ出土している。川崎スコリアより下位の9層からは二次加工ある剥片が1点出土している。15・17層から石斧（ヘラ形を呈した両面加工石器）、スクレイパー（斜軸尖頭器を含む）を主体とする石器群が出土している。石核の形状、剥片の背面構成などから求心的な剥片剥離の存在がうかがえ、また、両極剥離もおこなわれていたと推察される。自然面打面のものや背面の一部に自然面を有するものが半数を占める。ヘラ状を呈した両面加工石器には、側面観がジグザグ状のものと、比較的直線的なものとがある。斜軸尖頭器は、素材にぶ厚い剥片を用いており、折れ面も利用しながら打面部に深い二次加工を加えてジグザグ状の縁辺が作出されている。スクレイパー類には錯向剥離が多用されている。

【上ノ原山遺跡】（主浜ほか1995）

当遺跡は国道286号線改良工事に伴い、1989～91年にかけて仙台市教育委員会によって発掘調査がおこなわれた。5～10層にかけて旧石器時代の石器群が層位的に出土している。発掘面積が広く、石器群のまとまりが把握できる。層序を整理すると、7層上部に川崎スコリアのブロックを含む。川崎スコリア層より上位を観察すると、上

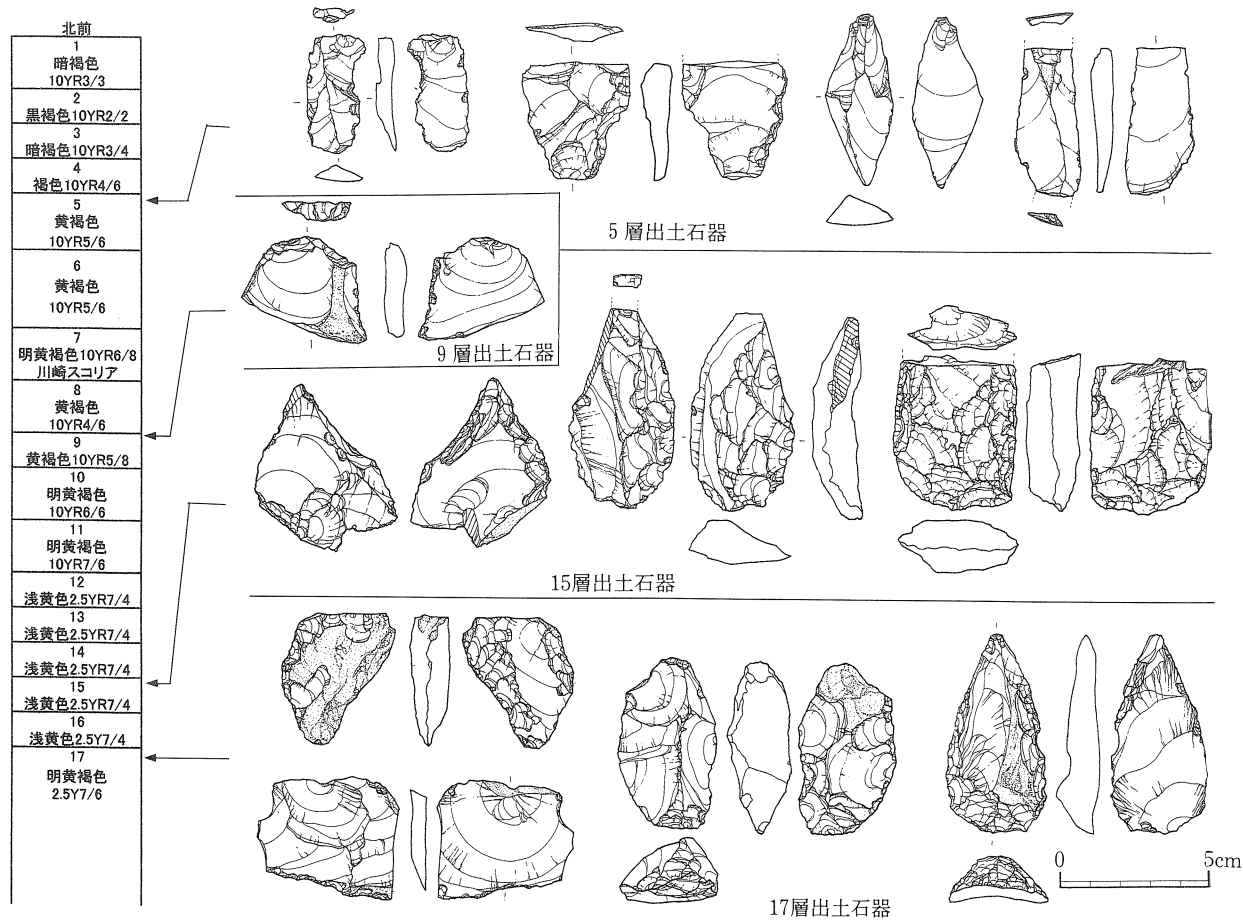


図32 北前遺跡の層序と石器
Fig. 32 The stratigraphy and lithic artifacts in the Kitamae site

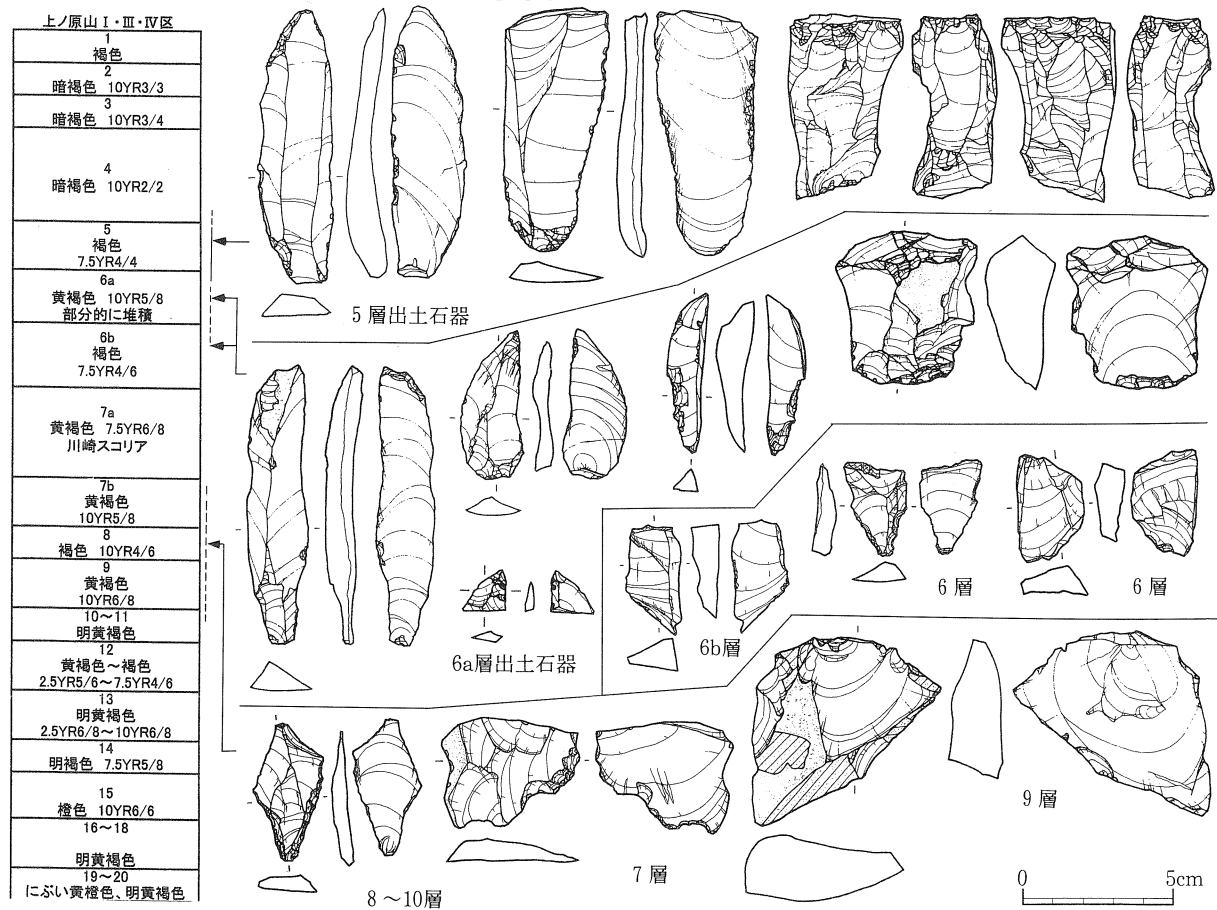


図33 上ノ原山遺跡の層序と石器
Fig. 33 The stratigraphy and lithic artifacts in the Uenoharayama site

半（5層）が軟質、下半（6a、6b層）が硬質となり、色調の変化は山田上ノ台遺跡の1984年度調査の層序によく合致する。6a層に比べて6b層は暗くなり、これが「暗色帯」と考えられる。6a層は部分的な分布ではあるが、6b層より明るい色調であり、山田上ノ台遺跡の第6層に相当するものと考えられる。したがって、周辺の堆積状況から推定して6a層にATを含むことが予想され、この層の色調が明るいのは火山ガラスを含む影響とも考えられる。IV区において、軟質ローム層である5層から珪質頁岩製の石刃を素材としたナイフ形石器、エンド・スクレイパーを中心とする石器群が出土している。ただし、この層には縄文時代の遺物も含まれている。ATを含む層と考えられる6a層からは、石刃の先端の一部に二次加工を施したナイフ形石器を組成する石器群が出土している。I区において、「暗色帯」に相当する6層から凝灰岩製の切出し形ナイフ形石器が出土している。この他にハンマー・ストーンなどの礫石器を伴う。川崎スコリア層を上部に含む7・8層からは、玉髓製のペン先形のナイフ形石器1点とスクレイパー、やや縦長となる剥片、礫石器などが出土している。川崎スコリアより下位の9層からは求心的な剥離による剥片2点と、剥片、礫石器が出土している。

【富沢遺跡】（太田ほか1992）

仙台市教育委員会がおこなった富沢遺跡の第30次調査では25～27層にかけて旧石器時代に属する石器群が出土した。遺跡の立地が沖積地のような低地であるため、他との層位の対比は困難だが、旧石器が発見された地点から離れた地点ではあるが、ATが確認されている。層序から石器群は全てAT降灰以降のものと考えられている。25層から基部加工や二側縁加工のナイフ形石器を主体とした石器群が出土した。出土した10点の石器は全て利器類である。石材は珪質頁岩、黒色頁岩、玉髓である。26層から一側縁加工のナイフ形石器と彫刻刀形石器の各1点が出土した。石材は珪質頁岩と玉髓である。27層からは111点（ピット状遺構から出土した6点を含む）が出土

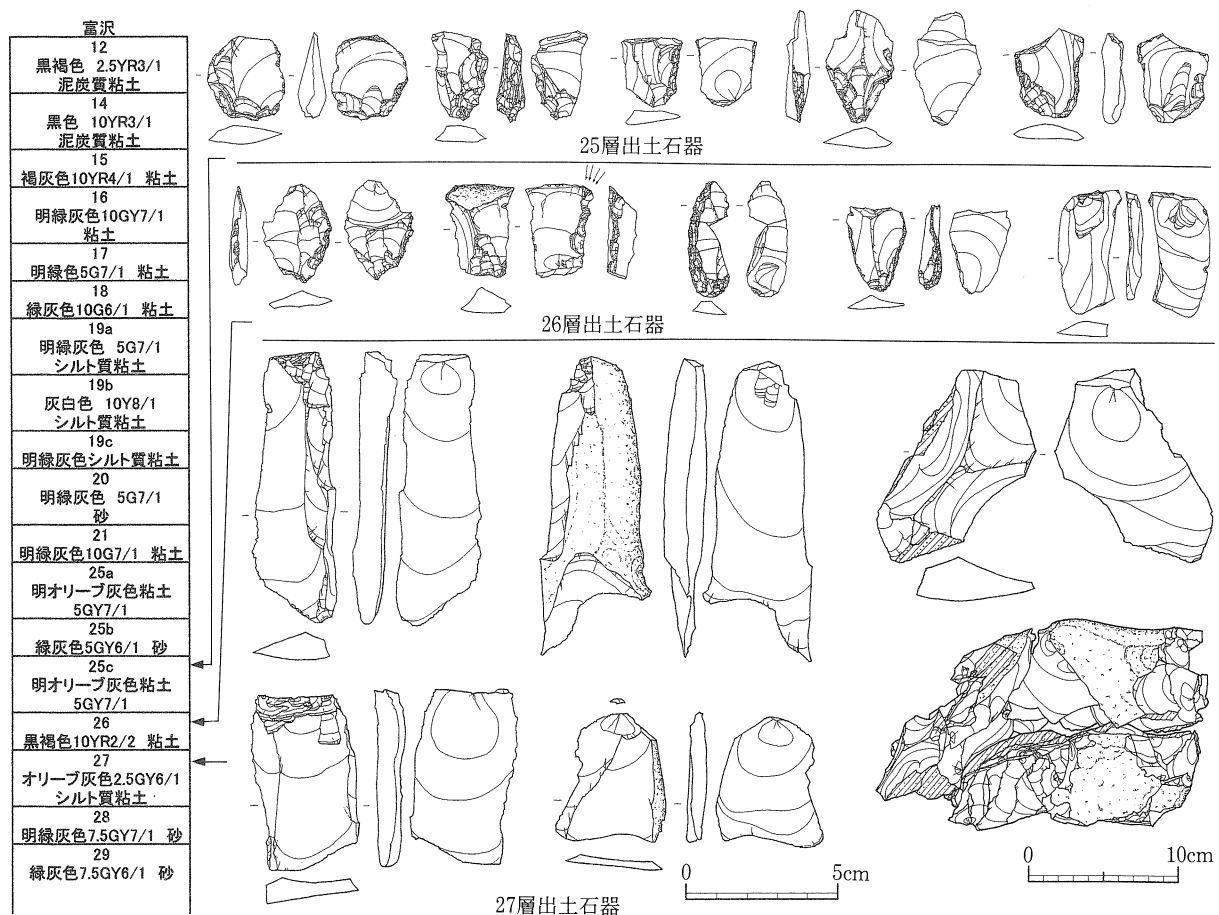


図34 富沢遺跡の層序と石器

Fig. 34 The stratigraphy and lithic artifacts in the Tomizawa site

した。その他、炭化物の集中箇所や礫などが検出されている。多くの接合・同一母岩資料が存在する。また、低湿地遺跡であり、樹木跡が検出され、当時の景観を復元する上で貴重である。

② 青葉山周辺の出土層位と石器群の整理

仙台市青葉山付近で層序の対比の鍵となる層は愛島軽石（Ac-Md）と川崎スコリア（Za-Kw）である。前者は熱ルミネッセンス年代で6.4万年前（市川1986）、E S R年代で5.4～8.3万年前（佐藤1986）、フィッション・トラック年代で8万年前（興水1986）、後者は約2.6～3.1万前（板垣ほか 1981）等の理化学的な方法による絶対年代の測定値が示されている。愛島軽石は青葉山遺跡群（B・E地点）で確認されており、これらの遺跡が位置する青葉山段丘が高位段丘であると言われている。また、川崎スコリアは青葉山遺跡群、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、上ノ原山遺跡で確認されている。さらに、これらの上位には、広域テフラのATが富沢遺跡と青葉山遺跡E地点の調査で検出されている。まず、多くの遺跡に共通して認められる川崎スコリアを基準に青葉山周辺の基本層序を整理すると以下のようになる。黒色の表土層の下位には黄褐色のローム層が発達する。このローム層は上半が軟質、下半が硬質となっている。さらに硬質のローム層は、下位の層が上位の層に比べて色調が暗く、あるいは「くすんでいる」ことが観察される。この層が「暗色帯」に相当するものといえよう。青葉山遺跡E地点の所見では、「暗色帯」に相当する層の上位にATが確認されており、上位層の色調が明るく見える。表土層下位にある黄褐色の軟質ローム層中には、山田上ノ台遺跡第5～6層上面、北前遺跡5層、上ノ原山遺跡5層の石器群が包含されている。一方、ATより上位の硬質ローム層中には青葉山遺跡E地点3層下部～4層上面、上ノ原山遺跡6a層の各石器群が発見されている。なお、上ノ原山遺跡Ⅲ・Ⅳ区では、6a層の堆積が部分的であり、5～6b層の出土石器の分布が重複する傾向にあること、5層と6a層出土石器に接合関係がみつめられることから一括して6a層相当の石器群となる可能性がある。また、これらの硬質ローム層とは直接的に対比ができないものの、ATより上位の時期とされている石器群として、富沢遺跡25～27層の石器群もこの時期に位置づけられよう。ATと川崎スコリアとに挟まれた層から発見された石器群は技術的相違から二つに分離することが可能となるかもしれない。すなわち、川崎スコリア直上の「暗色帯」中の出土のものには、調整技術が未発達な石刃技法を主体とするものと幅広剥片を素材とするものとが認められる。前者には青葉山遺跡B地点5層上面の石器群が相当する。後者は上ノ原山遺跡6(b)層、山田上ノ台遺跡7・8層上面、北前遺跡6層上面の各石器群である。

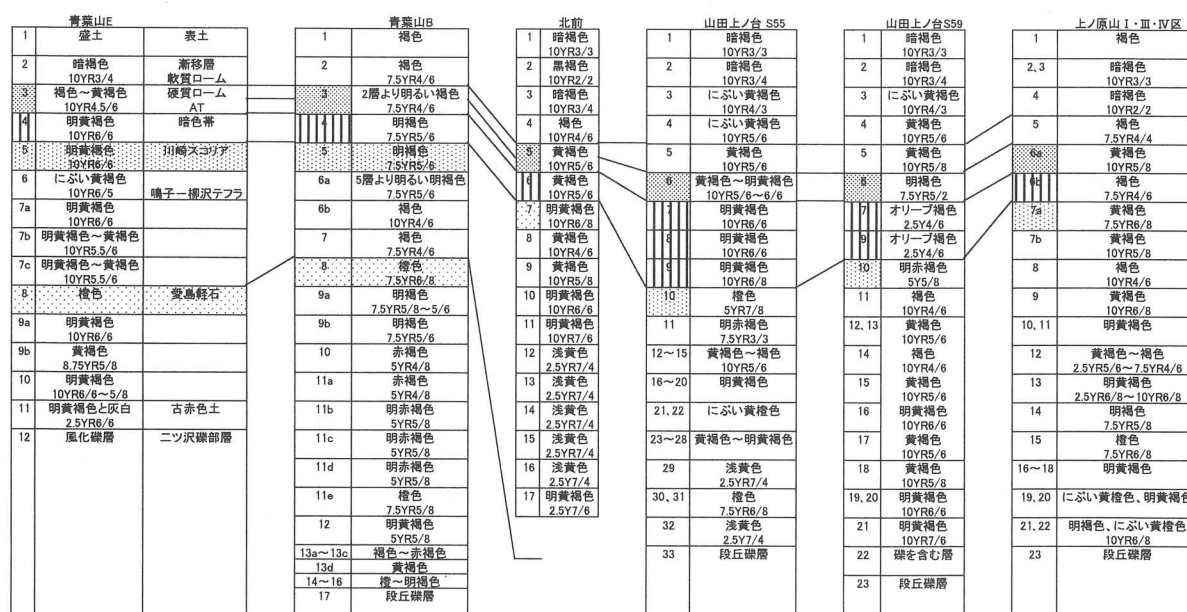


図35 青葉山周辺の旧石器出土遺跡間層序対比図

Fig. 35 Cross-section of stratigraphy, paleolithic sites around Aobayama

川崎スコリアより下位になると段丘面の形成時期の違いにも関連し、遺跡間の詳細な層の対比が難しい。川崎スコリアの直下の層では基本となるのは、高位段丘上にある青葉山遺跡群の層序となろう。青葉山遺跡A地点では御岳第1軽石（On-Pm1）と愛島軽石が確認され（豊島1998）、同E地点で鳴子-柳沢テフラと愛島軽石が発見されている。川崎スコリアの直下では、褐色ローム層が発達し、色調がやや赤味を帯びる。川崎スコリア層より下位、愛島軽石層より上位の層から出土する石器群は、上ノ原山遺跡7～9層、北前遺跡9層上面、青葉山遺跡E地点7b層上面、北前遺跡15・17層上面、山田上ノ台遺跡第21～31層の石器群が相当しよう。その中でも前二者は、川崎スコリア層直下の色調がやや赤味を帯びた暗いローム層中から出土しており、後三者より後出と考えられる。さらに、愛島軽石より下位の層から出土した石器群は青葉山遺跡B地点11d層のものと、それに相当する排土から出土した一群である。この石器群が青葉山周辺の遺跡群で最古のものと言えよう。

以上、遺跡間の層序の対比については図35に示した。

③ 結 語

ここでは出土層位の対比に基づき、石器群を編年的に整理し、その特徴についてまとめておく。青葉山周辺の遺跡群で最も古い石器群は青葉山遺跡B地点11d層から検出された石器群である。また、排土から発見された一群もこれに相当すると推定される。愛島軽石層より下位から出土した石器群である。打面と作業面を頻繁に転移する剥片剥離技術を基盤とし、両極剥離が認められる。小型のスクレイパー類が特徴的である。一方、扁平礫を素材とした礫器も存在する。珪質頁岩を用いず、玉髄、チャート、流紋岩といった近隣で採取可能な石材が主体となっている。当石器群の年代観は、出土した11d層がTL法で約187,200Y.B.P.を示すことから、前期旧石器時代に位置づけられる。東北地方では宮城県築館町高森遺跡（山田編1988）、大和町中峯C遺跡最下層（小川ほか1988）、古川市馬場壇A遺跡第32・33層・20層（山田編1988）、福島県二本松市原セ笠張遺跡第2～5文化層（柳田編2000）等の各石器群が当該石器群としてあげられる。これらは玉髄、鉄石英、碧玉を多用した3cm前後の小型石器類を組成するのを特徴としている。青葉山遺跡B地点11d層から出土した珪質シルト岩製のノッチはこの特徴を有している。

次に古い時期のものは愛島軽石層より上位、川崎スコリア層より下位にある石器群である。中期旧石器時代に位置づけられよう。この時期は、川崎スコリア層より下位の一群と、さらに下位の赤味を帯びた褐色ローム層から出土する一群とに大きく区分することが可能である。層位的にみて前者が新しく、後者は古くなる。後者の中でも青葉山遺跡E地点7b層上面の石器群は愛島軽石と柳沢テフラに挟まれて出土しており、この一群でも最も古くなる。上述したように理化学的年代が愛島軽石は、5.4～8.3万年前の幅があり、広域テフラである阿蘇4（Aso-4）よりも下位にあることが判明している（八木・早田1989）。また、柳沢テフラは約5万年前との測定値が示されている（山田編1988）。当石器群からは、大きさが4～5cm前後の尖頭器（斜軸尖頭器を含む）や剥片類が出土している。これらは打面や作業面を頻繁に転移する剥離技術によって作出されている。二次加工は、器体の周縁部に施され、素材面を大きく残す。奥まで入る剥離はみられない。周辺加工の石器がその特徴と言える。時期的に近いものとして、古川市馬場壇A遺跡第10層上面（山田編1988）、福島市竹ノ森遺跡上層（柳田1997）等の石器群があげられよう。青葉山遺跡E地点7b層上面の石器群より後出するものとして、山田上ノ台遺跡第21～31層において出土した斜軸尖頭器、スクレイパー、礫器、石核を含む石器群と、北前遺跡15、17層の斜軸尖頭器、ヘラ形を呈した両面加工石器を特徴とする石器群であろう。これらは求心的な剥片剥離技術、両極剥離技術を有する一群である。ただし、斜軸尖頭器やヘラ状を呈する両面加工石器を検討すると、二次加工やその形状がそれぞれ異なっている。北前遺跡下層のヘラ状を呈した両面加工石器類は福島県西郷村大平遺跡第7層の石器群に類似する（柳田1997）。この石器群の年代は、出土層が大山倉吉軽石（DKP）の直上にあることから、約5万年前に位置づけられている。また、石材をみた場合、珪質頁岩と近隣で採取可能な石材が主に用いられ、特に粗粒の石材が大形の利器類に使用されている。ここでは扁平礫や円礫を素材とした礫器が一定量存在する。さらに、層位的に川

崎スコリア層の直下の赤味を帯びた褐色ローム層から出土する一群としては上ノ原山遺跡7・8層の石器群があげられる。打面と作業面を頻繁に転移する剥片剥離技術を基盤として石器製作をおこなう一群であり、利器類としてはペン先形のナイフ形石器も含まれる。ただし、この石器は倒木痕の埋土から検出され、当遺跡の8層相当の層から出土していることになっている。したがって原位置が失われている可能性も考えられる。後期旧石器時代前半期の台形様石器群と一部共通性をもつ石器でもある。

次に、後期旧石器時代前半期の石器群としては川崎スコリア直上の「暗色帯」中から出土したものである。石器群の様相から二つのグループに分けられる。一つは、青葉山遺跡B地点5層の石器群である。調整技術の未発達な石刃技法を主体とする石器群である。利器類として、縦長剥片を用いたサイド・スクレイパー、ノッチ、ナイフ形石器が組成されている。ナイフ形石器は打面周辺と先端部に細かな調整剥離が施される。二次加工が粗雑である。これらの石器群は、秋田県風無台I遺跡や松木台Ⅲ遺跡（大野ほか1986）、山形県岩井沢遺跡（加藤・渋谷ほか1971）、岩手県峠山牧場I遺跡（高橋ほか1999）、会津地方の笹山原遺跡群（A・N0.10遺跡）（柳田1995・阿部ほか1999）等で発見された調整技術の未発達な石刃石器群のグループに類似する。他のグループは、山田上ノ台遺跡第9層のような縦長剥片を素材としない、幅広剥片を利器に用いる石器群である。ただし、石刃技法は認められないが、縦長剥片も有する。利器類には、在地の石材を用いたペン先形のナイフ形石器（上ノ原山遺跡6層）や珪質頁岩製の石斧（山田上ノ台遺跡第8層）も含まれる。主として石材に珪質頁岩と在地の凝灰岩が用いられている。この二つの石器群は、山田上ノ台遺跡のように文化層が明確に区分される場合もあるが、いずれも出土点数が少なく、細分された暗色帯を基準とした遺跡間の対比は困難であり、青葉山周辺の遺跡群では明確に区分することはできない。これらの石器群は、東北地方の岩手・福島両県の内陸部ではAT下位から出土しており、現在のところ後期の前葉のものとしてとらえておくのが妥当であろう。このように、青葉山周辺では川崎スコリアを前後して石器群の様相に大きな画期がみられることになる。この川崎スコリアの降下時期は、約2.6～3.1万年前とされており、中期から後期へ移行する時期とみられる。

後期旧石器時代後半期のものとしてATより上位の硬質のローム層から出土したものがあげられる。珪質頁岩製の石刃を用いた利器類が主体となる。石刃の基部や先端部、さらには側辺の一部に二次加工を施したナイフ形石器、エンド・スクレイパー、サイド・スクレイパーが組成する。石刃技法は、頭部調整や稜調整、180度の打面転移がおこわれ、連続的に石刃を剥離する、いわゆる「調整技術の発達した石刃技法」である。石材は珪質頁岩と凝灰岩が主体となっている。また、青葉山遺跡3層下部～4層上面で出土したような在地の石材である石英安山岩を用いた石刃もみられる。これらは奥羽山脈西側の山形県で発見されている調整技術の発達した石刃石器群に類似している（加藤1965）。この他に、ATより上位から出土した石器群は、富沢遺跡25・26・27層の石器群があげられる。富沢遺跡の石器群は、石刃以外の素材を用いた利器類も組成し、基部や側縁に二次加工を施したナイフ形石器や彫刻刀形石器が存在する。基部加工した石器は形態が台形様石器に類似する。幅広な剥片が素材として用いられているが、中には石刃状の剥片も含まれている。石器群の様相からみれば、むしろ日本列島内でATより下位から出土する台形様石器群に類似しており、この時期の石器群とは異なる特徴を有していることになる。当遺跡ではATが石器群と別地点で確認されていることや、出土層が他遺跡のAT上位にある黄褐色硬質ローム層と直接的に対比することができないため、その編年的位置づけについては今後の課題としたい。

次に、後続する後期旧石器時代後半期の後葉の時期に相当するものは軟質のローム層から発見された石器群があげられる。珪質頁岩製の石刃を用いた利器類が多く、基部や先端部の一部に二次加工を施したナイフ形石器やサイド・スクレイパー、エンド・スクレイパーがみられる。さらに、これらに伴って両面加工の尖頭器が共存する遺跡もみられる。石材は珪質頁岩と凝灰岩が主体となっているが、玉髄、チャート、鉄石英といった石材の割合も増加する。山田上ノ台遺跡第5・6層では在地の石材を用いた石器製作もおこなわれている。この時期は、一部晩期旧石器時代の石器群も含む可能性もあるが、層位的には区分できない。

以上、青葉山周辺の遺跡から出土した石器群を出土層位に基づいて時間的に並べ、その編年案を提示した。これまで東北地方において層位的な手続きに基づき、後期旧石器時代の編年を組み立てることが困難とされてきたが、近年の層位的な発掘事例の増加によって、編年の構築が可能となってきた。その際に、後期旧石器時代においては広域テフラであるATの下位に発達する「暗色帯」の認識が重要かと考えられる。東北地方の太平洋側ではATとその下位に発達する「暗色帯」の存在が確認されてきており、福島県においては会津・中通り・浜通りの三地方の各遺跡等でその様相が報告されている。また、岩手県下においては「ガラス質淡黄褐色火山灰」として認識されているものが「暗色帯」に相当する(菊池ほか1996)。さらに、奥羽山脈西側、山形県新庄盆地の上ミ野A遺跡でも、石器群とATとの関係も明らかにされており、そこでも「暗色帯」の認識が可能となっている(柳田 須藤 阿子島 2000)。ATとその直下にある「暗色帯」の認識は東北地方でのより広域的な編年案を目指す際の基準となり得る可能性がある。

一方、中期から後期へ移行する時期のテフラとしては地元の火山灰である川崎スコリアがあげられる。青葉山周辺では遺跡によっては「層」として認識でき、その年代観は約2.6～3.1万年前を示している。このテフラを境にその上位にある後期旧石器時代の石器群とそれに先行する石器群とに大きな変化がみられる。川崎スコリア層の下位から出土する石器群は、広域テフラである阿蘇4、大山倉吉等との関連で把握された宮城県北部、岩手・福島両県の前・中期旧石器時代の石器群に類似しよう。したがって、青葉山遺跡B地点11d層、同E地点7b層上面から検出された石器群の特徴は、これらの地域の当該期編年とその整合性が認められることになろう。宮城県内では広域テフラと地元の火山灰である愛島軽石や柳沢テフラの層位的な位置関係も確認されており、これらを知ることが石器群の年代を知る上で貴重な手がかりとなっている。今後、東北地方の旧石器時代の編年研究は、この恵まれた地元の火山灰と広域テフラの関係を明らかにしながら、石器群の様相について比較検討することがますます重要になるであろう。